

日本パーソナリティ心理学会第24回大会
広報委員会企画シンポジウム「心理学におけるマルチメソッド・アプローチ」

指定討論

マルチメソッド・アプローチに触れて考えたこと ～臨床心理学の立場から～

大阪大学大学院人間科学研究科
佐々木淳 Sasaki@hus.Osaka-u.ac.jp

北海道教育大学札幌校

Aug 22, 2015

心理療法における 「統合・折衷」の流れ

- これまでの臨床技術をどのように統合・折衷して患者を治療するのか
- 1) どの患者のどの問題に対して、
- 2) 何と何を選んで、
- 3) どのように提供するのか
- → オーダーメイド: 臨床家の「眼力」・「アセスメント能力」が問われる。これにマルチメソッド・アプローチは似ている。

マルチメソッドの意義

- 質問紙のよさ、実験のよさ、インタビューのよさ
- 単一の研究手法による現象のとりこぼしをおさえる
(長谷川先生)
- 現象のリアリティに迫ることができる
(回顧法<アイトラック:鈴木先生)

横にひろげる、縦にせまっていく方法

マルチメソッド・アプローチの発展は 心理学に何を与えるのか

- 研究法を組み合わせていくのは、完全形にみえる
- このアプローチは「成長」するのか、「増殖」するのか、あるいは「両方」なのか？
- Ex. マルチメソッド・アプローチを10年おこなうと・・・
 - その研究者は何が上手になるのだろうか？
(研究法の利用者として)
 - その研究者は何をアプローチに返していけるだろうか？
(研究法の研究者として)
 - その研究者は人材をどのように再生産するのだろうか？
(教育者として)
- 知見の蓄積だけでなく方法論の使用感をどのように研究の場で蓄積できるのかを考えていく必要があるのではないか

マルチメソッドから得られる 臨床心理学への効用

- Q:「この研究結果をどう現場で応用したらよいかわからない・・・」と実践者が言ったらどう教えてあげるか？
- 研究者間の知識の提供に向く知識の形と、実践者への知識の提供に向く知識の形がある
 - 臨床家の気持ち:「患者の言葉にふれたい」「患者の言葉そのものから学びたい」 など
- 量的研究に質的研究を加えることで、科学的知見への心理的ハードル↓

基礎と臨床をつなぐために 必要となる技術

- 研究者:「理論を翻訳する技術」が必要
→今は個人のセンスと臨床経験によって決まってしまう
→研修が組めるとよいが・・・
- 実践家:一般理論から患者の個別的表現を想像し適用する
技術(エビデンス・リテラシー)
→アンテナが広がる エビデンスが後ろ盾になる
- 「科学的知見に対して実践家がどのように反応するのか」を
科学するほうが本当は早いのかも

ご発表へのコメント

- 長谷川先生:「複数の手法で同一の構成概念の測定を行い、結果が一致しない場合、『どこかに誤りがある』と考える」というスタンス → どちらも「正解」かもしれない。
- 面接者との関係性や文脈が影響を及ぼしやすい題材とそうでない題材
- 面接者がプレーンな存在であることはまずなかろう
 - 自分がどう関わっているのか、どうその人を感じたのか
 - 量的質的、主観的
- 鈴木先生:テスト・評価にまつわる様々な問題に対して、その問題の解明にあわせた方法を使用している
- アイトラックと合わせて、回顧法を使うのも面白そう。フィードバック情報の主観的評価など。

研究法間に知見のズレを発生させて面白がるのもメソッドの意義？

質問してみたいこと

- 「マルチメソッド・アプローチの専門性」とは何なのだろうか。
- 「マルチメソッド・アプローチへの寄与」があるとしたら、何があるのか。

ご清聴ありがとうございました

sasaki@hus.osaka-u.ac.jp